

## 水俣現地環境学習についての調査

—より有意義な学習のために—

財団法人 水俣病センター相思社

遠藤 邦夫・高嶋 由紀子

### 1、事業の目的

本事業は、小学校対象のモニターツアーを行い、成果を整理・解析し、エコセミナー制度を補完し、今後の充実した水俣環境学習のあり方を探ることを企図するものである。

水俣病センター相思社では、水俣病の経験を次世代や世界に伝えるために、水俣病歴史考証館を拠点としたエコミュージアムの視点から、水俣を訪れる小学生から大学生・大人までの水俣案内を行っている。

小・中学生の社会科見学・環境学習、高校生の教育旅行、大学生のゼミ合宿など、学習を目的とした水俣訪問は1990年代の環境創造みなまた推進事業(注)の頃から増加し始めた。

学びの内容は、水俣病だけでなく、水俣市の資源ごみの分別、安心安全の食べものの作りを評価した環境マイスター制度などの環境への取り組みである。

そのことは、児童・生徒の学びに止まらず、水俣地域社会へも以下のように還元されている。水俣が注目されることによって、水俣の人びとが改めて水俣の存在を見直し、地域のプライドにつながった。地域住民の自信は、水俣病を受け入れることにつながった。これらことが水俣病患者と市民の心の絆を結び直す「もやい直し」の内実となっている。

熊本県は、平成14年度にエコセミナー制度を発足した。県内の1/3(約150校)の小学校を指定して、5年生が水俣現地学習を行い、1/2の経費の補助(有料施設を除く)を行う。3年で全ての学校を一巡するしくみになっている。目的は「水俣は、いま、公害被害から環境再生へ立ち上がっています。この水俣を児童が自ら調べ学習を通して課題を見つけ、さらには、その解決のために情報を収集し、判断し、行動を起こすことができるようになること」である。

3年に1回のエコセミナー補助制度は、水俣病学習を行いやすい環境を作った。制度自体の存在は有意義なものであるが、問題点もある。

エコセミナー事業が開始される前にも、自費で水俣を訪れていた学校は多い。ところが、3年に一度補助が出るという制度は、それまで毎年自費で水俣現地学習を実施していた学校が3年に1回だけしか来られなくなったり、「今までは水俣病歴史考証館を見学していたが、今年はエコセミナーの対象校となったので考証館に行けなくなった」、「エコセミナーの対象校となったので、指定された施設をみんな回ると、漁村に行ったり、水俣の海に行ったりして自然と親しむ時間がなくなった」といった声が出ている。

3年に1度の助成が、自費での水俣学習を制限するわけではないし、訪問施設<sup>1)</sup>の提示は、実際には、全ての施設を回るように制限しているわけではないが、実態としては、3年に1度行けばよい、決まり切ったコースに行き

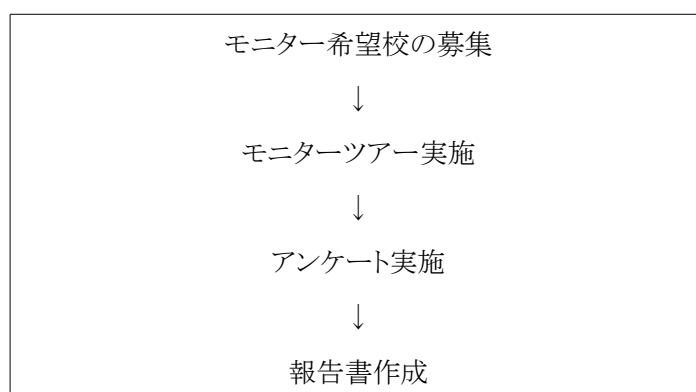
---

1 国立水俣病情報センター・熊本県環境センター 環境シアター 水俣市立水俣病資料館・水俣市環境クリーンセンターが指定されている。

さえすれば事足りる、あるいは提示された施設を巡らねばならない、というように学校側の意識を束縛している。学習のさらなる充実のためには、パッケージされた学習プランに頼らない、学校ごとに主体的なバラエティーに富んだ水俣学習が必要である。また、現地で学ぶ意義を考えれば、施設で完結する学習でなく、施設とフィールドを組み合わせた学習が必要と考えられる。

そこで、今年度エコセミナーの対象となっていない県内5校程度の小学校を対象として、水俣案内のモニターツアーを実施することとした。終了後、児童を対象にアンケートを行い、その結果から、水俣現地学習の方法を再度見直し、より充実した学習方法の提言を行った。具体的な成果としては、水俣案内で訪れる場所や施設の概要説明、写真および案内の目的などを入れ込んだ報告書を県内の小学校へ配布するとともに、ホームページ上へ掲載し、活用してもらった。

## 2、事業スキーム



## 3、実施報告

### (1)モニターツアーの実施

実施校は5校を予定していたが、下半期の事業実施は委託事業決定の8月の時点ではすでにスケジュールを決定している小学校が多く、4校しかモニターツアーが実施できなかった。今回は相思社のホームページで主に募集をかけたが、応募が集まらず、再度、手紙や電話などによって募集を募った。3校目の大津小学校と4校目の山江小学校は、すでに学習スケジュール組んでいたが、それを曲げて、モニターに応募してもらうことになった。その関係で案内時間は2時間と短くなっている。

①実施日時:2006年10月5日～2007年2月7日

②案内:相思社職員および委託ガイド(遠藤邦夫・高嶋由紀子・川部岬・小里アリサ)

③協力者:生駒秀夫(水俣病患者)、杉本肇(漁師)、企業組合エコネット水俣、社会福祉法人ほっとはうす、水俣自然学校

④モニターツアー実施および実施内容

1.A小学校 生徒 142人 バス3台 案内時間5時間、2006年10月5日

水俣市立水俣病資料館見学の後、水俣湾埋立地見学、百間排水口見学を行い、その後天気が良かったので

昼食を外で摂った。昼からバスごとに分かれて体験メニュー(エコネットみなまたで石けん作り、ほっとはうすの人たちとしおり作り、水俣自然学校の小里さんとお魚さばき)を行った。

2.B小学校 生徒 55 人 バス2台 案内時間4時間、2006 年 10 月 19 日

水俣湾埋立地見学、百間排水口見学、グリーンスポーツ海岸散策を2人の案内人で実施した。グリーンスポーツの海を見ながら昼食をとり、その後水俣病センター相思社集会棟で生駒秀夫さんのお話を聞いた。最後に水俣病歴史考証館見学を行った。

3.C小学校 生徒 132 人 バス3台 案内時間2時間、2006 年 11 月 16 日

水俣湾埋立地見学、百間排水口見学、グリーンスポーツ海岸散策を、3人の案内人で実施した。時間は短かったが生徒たちは、日頃海に触れていないこともあって大いに喜んだ。

4.D小学校 生徒 12 人 バス1台 案内時間2時間、2007 年 2 月 7 日

モニターへの応募が遅く、既定のスケジュールの中に案内を組み込む時間が少なかった。それでも昼食を杉本水産加工場近くの海辺でとり、加工場で杉本肇さんの漁をお話を聞いた。杉本さんからは自分の辛かった小学校時代をふりかえりながら、みんな何でも話し合える友だちになってくださいとメッセージをいただいた。その後水俣市立水俣病資料館の見学を行った。

## (2)アンケート調査

調査は、調査票によって記入式で行った。エコセミナーでは環境学習の目標を「環境にやさしい心情を育むとともに、環境保全活動や環境問題の解決に意欲的に関わろうとする態度や能力を育てる。実践を通して児童生徒の豊かな人間性を育む」としている。ここに見られるように、環境教育は「知識・理解」や「体験」が最終的に「態度の変容」に結びつくことが求められている。このような環境学習の特質を考えれば、成果は短期的に表れるものではないし、効果を定量的に把握することは非常に困難である。熊本県では、エコセミナーの評価指標の一つとして、学校へのアンケートから「『半数以上の児童に、環境保全活動や環境問題に主体的に取り組もうとする等、環境に対する意識や態度・行動の変容を感じる』と回答のあった学校の割合」などを用いている。

それらを補足するために、ここでは、児童への直接的なアンケートによって、学習成果を把握することとした。ただし、先にも述べたように、筆者は、環境教育は学校教育を含めた生涯学習の中に位置づけられるべきであり、長いスパンの継続的な学習過程と考える。したがって、ここで述べられた結論は、限られた一側面であることを、最初に断っておきたい。

### 設問1 水俣に来る前に、水俣病と水俣について学習をしましたか？

	人数	%
学習した	197	82%
学習しなかった	43	18%
合計	240	100%

(学習した人は)どんな学習をしましたか？(複数回答)

	人数	%
ビデオを見た	283	83%
教材を読んだ	251	74%
話し合った	240	70%
インターネットで調べた	94	28%
その他	8	2%
合計	876	257%

設問2 来る前に考えていた水俣と、実際に来て見た水俣は違ったところがありましたか？

	人数	%
思ったとおりだった	56	23%
違うところがあった	184	77%
合計	240	100%

(自由記述を記述内容で分類した)

(2) 違うところ	A校	B校	C校	D校	合計	%
1 海や自然がきれいなこと	7	4	10	2	23	28%
2 埋め立て地のこと	3	5	4	1	13	16%
3 患者が明るいこと	5	1	1	0	7	8%
4 水俣病は恐ろしい病気	0	4	4	5	13	16%
5 その他	10	6	9	2	27	33%
合計	25	20	28	10	83	100%

「違うところがあった」という回答が多く、現地見学で新しい発見があったことが分かる。自由記述の内容の傾向には学校ごと(コースごと)にばらつきがあるが、「海や自然がきれい」という回答が平均してどの学校にも見られている。次に「埋め立て地が広い」「埋め立て地がきれいな公園になっていた」など、実際に現場を見たことによる発見、「水俣病は思っていたより恐ろしい病気」などパネルを見たり患者の話を聞いて分かったようである。「患者が明るい、元気」は、ほっとはうすで押し花作りをしたグループの感想に多かった。

設問3 何が一番印象に残っていますか？ (いくつでも書いてください)

(自由記述を記述内容で分類した)

(3) 何が一番印象に残っていますか？	A校	B校	C校	D校	合計	%
1 体験(海で遊んだ事含む)	17	2	7	0	26	25%
2 患者の話	13	10	9	2	34	33%
3 自然環境	5	3	7	0	15	14%
4 施設・スポット	3	6	7	5	21	20%
5 その他	5	1	2	0	8	8%
合計	43	22	10	7	104	100%

魚さばき、しおりづくり、石けんづくりなど体験に時間を割いた西合志東小学校は、体験を上げている回答が突出している。「石けん工場ではオレンジジュースを飲んで苦かったこと」「特に「魚さばき」の体験は印象に残ってい

る児童が多い。水俣の海を目の前に、手を動かして捌いた魚を食べた体験は印象が強く、「水俣の海でとれた魚を水俣の海を見ながら食べられたこと」という答えもあった。また、体験学習ではないが、「水俣の海で鐘を鳴らしたこと」というような埋め立て地慰霊碑の前で鐘を鳴らすというような、自分で手を動かして感じたことが、印象づけられていることが分かる。

患者の話はどの学校の児童も強く印象づけられている。「水俣病はうつらないのにみんなから差別されてきたこと」などを学んだほか、「生駒さんががくがくになっていたのに、一生懸命話していたこと」「上野さんが泣きながら説明してとてもたくましかった」など、実際に患者と対面することで実感を持てた児童もあった。

しおりづくりを行った西合志東では、「しおりと一緒に作った水俣病の方との会話」「水俣病の方々のふれあい」「ほっとハウスの人とふれあって、一緒に作業したこと」など、話を聞くだけでなく体験を通して身近にふれあえた経験が、児童へのインプレッションが強かったことが分かる。また、「しおり作りに行って、水俣病の人に話を聞いてそれが印象に残った。」「しおり作りをして水俣病の患者と会えたことがうれしかったです」など、案内人にとっては「水俣病を伝える」一環としての「しおり作り」であるが、児童にとっては「しおりを作りに行く」のが最初の目的で、しおりづくりに行ったら「患者に会えた」という受け止めており、そこに新鮮な発見があったことが伺われる。また、体験プログラムを入れられなくとも、「海岸へ行っていろいろいきものとふれあったり、岩のところから、ちよろちよろ出ている、水をなめても、しょっぱくなかった。また行きたい。」などと、海で遊んだことを上げている児童は多い。

また、親水護岸では「ぐうぜん出会ったMさんの恋路島の伝説の話と、55体のおじぞうさんがあったこと。」「おじぞうさまが55体もあると、Mにおしえてもらって、みたところ。」などの回答もあった。親水護岸では案内人の説明だけでなく、Mさんという地元の人との偶然の出会いという、予想外の出来事が印象に残っていることが分かる。また、「遠藤さんの一生懸命いろいろ話しているところが一番印象に残りました」など案内人自身に興味を持った児童もいた。

#### 設問4 水俣から帰って家の人に水俣の話しをしましたか？

話した	254	88%
話していない	34	12%
合計	288	100%

#### 何を話しましたか？

(自由記述を記述内容で分類した)

(4) 何を話しましたか？	A校	B校	C校	D校	合計	%
1 体験(海で遊んだ事含む)	18	0	7	0	14	15%
2 患者のこと	16	9	9	5	39	42%
3 自然環境	1	4	7	0	5	5%
4 施設・スポット	4	2	7	2	15	16%
5 その他	3	3	12	1	19	21%
合計	42	18	42	8	92	100%

多くの児童が、帰宅後、現地学習の話をしている。内訳については、(3)と同様の傾向を示している。「魚の身がふわふわしてておいしかったこと」「石けん工場ではみがきをして、ジュースを飲んでからのちがいがいいや」「しおりづくりで、胎児性の人たちと会って、自分と違う暮らしだったけど、頑張っていたよ」、「ほっとはうすの水俣病患者さんは、明るくて一人の人がアコーディオンをひいてくれたこと！！」「音楽をひいてくれたんだよ。」などの触れ合いが印象に残った体験を話している児童も多い。また「水俣病の苦しさ、水俣病の差別、チツソ工場のこと。」、「水俣病はうつらない。水俣病の人や水俣市の人にはひどいさべつをうけたんだよ」など、家族に水俣病についての知識を伝えた児童もいた。「自分の家の新聞の量がわかった」(環境センター)「ごみの分別の仕方」など、家庭の暮らしに結びつくことを話している児童もいた。

なお、アンケートには、母数が少ないことや質問項目の不備によって児童が聞かれている内容を的確に把握できなかった(事前学習のことを聞かれているのに、多くの児童が現地学習のことを答えてしまった)などの問題点があった。今後、調査対象を増やし、実施方法や調査項目を精査した上で、追加調査を行う必要があるだろう。

### (3) 報告書の作成

フィールドを通じた水俣現地学習の提言を行った。水俣案内で訪れる場所や施設の概要説明、写真および案内の目的などを入れ込んだ報告書を作成し、県内の小学校に配布した。(別紙)

## 4、まとめ

現地学習は、水俣のイメージを変えたり、新しい発見を与えたりしていることがわかった。また、児童は話を聞くだけでなく、五感を働かせることで様々な発見をしていることが分かった。たとえば、海でたくさんの生き物とふれあうことで、海の豊かさを感じる児童が多かった。Mさんとの出会いや、胎児性患者がアコーディオンを弾いてくれたことなど、プログラムされたメニュー以外の、偶然の出空いや、思ってもいなかった出来事が、児童にとって記憶に残っていることも分かった。

学校の現地学習では時間に制限があり、おおかたは4時間前後の滞在である。中学校の中には、芦北青年の家などに宿泊して1日を水俣病学習に充てている学校もあるが、小学校の環境学習では難しい。限られた時間の中で、児童が五感で水俣を感じられるようなプログラムづくりを工夫していくことが必要である。また、案内人にも、単にメニューをこなすだけでなく、偶発性をも大事にしつつ、全体を導いていくような態度が求められるだろう。

水俣現地には、相思社や水俣教育旅行プランニングなど、学習旅行の全体コーディネーターが可能な組織がい

くつかある。そのような団体に計画段階で気軽に相談できるようになれば、教員の負担が軽減されるとともに、より充実した計画を立てることができるだろう。そのような学校と現地との連携を積み重ねていけば、より効果的な学習計画を立てていくことが可能になってくると思われる。

(このレポートは、2006年度熊本県助成水俣病関連事業情報発信事業「水俣病学習支援のためのモニターツアー」をもとに作成されました)